
離教

ずわいがに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
離教

【Nコード】
N4974J

【作者名】
ずわいがに

【あらすじ】
AL I P R O J E C Tの曲、「s c h i s m」のイメージ小説です。タイトルは曲名の意味。

(前書き)

後半部分は少し性的、暴力的表現があります。
苦手な方はご注意を。

「ねえ：一体何が目的なのよ？」

キレてしまいそうになるのを懸命に堪えながら、真理は目の前にいる自分と全く同じ姿の人物を睨みつけた。

そう、本当に全く同じなのだ。違う部分など一つも見当たらない。外見も、性格も、何もかも全て同じ。

それが真理の不安と恐怖を煽り、全身から漂う紫のオーラの様なものが、更に不気味さを引き立てる。

「ちょっと：聞いてんの？ なんとか喋ったらどう！？」

叫ぶ事でいくらか気持ちが紛れるかと思いい、いつも以上に口数が多くなる。

しかし、目の前の「真理」は、一言も言葉を発する事は無く、不気味な笑みを浮かべながら真理を光の無い目で見据えるだけだった。真理はとにかく言い様の無い不気味さを感じていた。

未だ自分を見据えている「真理」は、微笑んでいる様だが目が笑っていないうえ、微動だにしない。

やがて「真理」は立ち上がり、蠟燭を懐から取り出して火を灯す。その手は紙の様に白く、精気が無いように感じられた。

蠟燭を近くの少し低い机の上に置くと、真理にはもう目もくれずに足早に部屋を去っていった。

真理は直ぐに閉じられたドアを開けようとするが、いくら力を入れても開く気配は無い。

しばらく苦戦していたがやがて諦め、ゆっくりとベッドに腰掛ける。そこで真理は初めて気持ちを落ち着かせ、今居る部屋を見渡した。ドアは先ほど懸命に開こうとしていたものしか無く、窓は存在していない。

家具も今座っているベッドと、先ほど蠟燭が置かれた机、そして大きな姿見の鏡しか無い。

（あいつ…一体なんなの？何がしたいのよ…）

真理はベッドの上に横たわり、蝋燭の炎を何気なく見つめる。

その炎によって真っ暗な部屋に淡い光が生じ、その中に何かがぼんやりと映り出す。

（……？）

起き上がって近寄り、よく目を凝らしてその光景をじっと見つめる。

「…………ッ!?」

その光の中の光景を見て、真理は思わず絶句する。

自分の部屋と思われる場所で、最近付き合い始めたばかりの幹也と共に「真理」が存在していた。

幹也へは先ほどこの部屋で真理に向けたものとは違う、無垢を装った満面の笑みが浮かべられている。

更に、髪が濡れて艶めいているが、それが汗なのか只の水なのか、それともどちらかの体液なのか、真理には分からなかった。

「み…きや…あ」

泣きそうな顔でそう呟くと、見計らったかのように「真理」と幹也は強く抱き合い、唇を重ねた。

「っ……嫌ああああっ!？」

真理は頭を抱えて絶叫し、声が枯れるまで泣き叫びながら暴れ続けた。

一一一

ひとしきり暴れた後、真理は疲労した様子でベッドの上で横になり、茫然としていた。

蝋燭は暴れた際に机ごと破壊されたが、映像は今度は鏡の中に鮮明に映し出される。

それを真理は横たわった状態のまま、長い間開き続けて赤く染まった目で眺める。

（幹也…そいつは私じゃないよ…偽物なの…お願い、気づいて…）
真理は心の中で幹也に訴えかけるが、当然それが届くはずもなく、ついに幹也と「真理」は本格的に交わり始めた。

「う…あぁっ！？痛いっ痛いっ！やぁぁぁ！」

幹也によって「真理」が破瓜を迎えた瞬間、真理にも同じ様に激痛が襲う。

そこで初めて、今まで怪しい笑みしか浮かべなかった「真理」が苦痛の表情を浮かべ、

必死に歯を食い縛りながら体を震わせ、涙を流し始める。

真理の方は痛みを感じるものの、実際に破瓜を迎えてなどいないし、出血すらしていない。

ただ破瓜の痛みと何かが進入している感覚だけが伝わってくる。

どうやら「真理」が感じた感覚を、真理の体にも何らかの方法で伝えていられるらしい。

「あああ…幹也…幹也あ…あ…っ！？やぁっ、う…ええ！？」

激痛を堪えながら幹也の名を呼び続けていると、今度は腹に鈍い痛みが走り、内臓が圧迫される。

お互いに絶頂を迎えて直ぐ、幹也が「真理」の腹を思い切り殴ったのだ。

「真理」の目は驚愕の為か、大きく見開かれる。

幹也の性癖は特殊で、相手を痛めつけて弱らせ、その状態で犯すという事を好んだ。

その事を真理は知っていたが、「真理」は何も知らない。

ただ突然真理と同じ姿で現れ、真理と同じ男と共に寝た。只それだけなのだ。

「真理」は抵抗し、逃げ出そうとするものの、幹也の押さえつける力は非常に強く、姿勢を変える事すらできない。

殴られつつも「真理」は何かを泣きながら叫んでいるようだが、音声は伝わってこない。

幹也は何度も何度も「真理」の腹を、表情を変えずに殴り続ける。

胃液を吐いても、衝撃によって舌を噛み切って血が溢れても、幹也の手は止まらない。

かつて真理を見据えていた瞳は、虚ろで焦点が定まっていなかった。

「幹也…うゝ！？あゝあゝ！？」

その様子を食い入るように見つめていた真理だが、急に全身を凄まじい激痛が襲った。

なんとかしてそれを紛らわそうと再び暴れるが、痛みが引く様子は無く、むしろ強くなっていく。

鏡を割っても、映像は次は壁に映し出される。

そしてはつきりと、「真理」を抱きしめる幹也の声が聞こえてくる。

「愛してるよ、真理…」

それを聞いた瞬間、真理の理性と精神は崩壊し、絶叫しながら鏡の破片で両目を潰す。

しかし映像は今度は脳内に直接映り、真理を完全に発狂させた。

頭を壁や床に何度も打ち付け、破片で体を切りつける。

しばらくそうしている内に体が激しく震え出し、膝をついて胸を押さえると同時に、大量の血液が吐き出される。

（幹也…私も…愛してた…よ…）

その言葉を最後に、真理の意識は途絶えた。

だが、完全に意識が途絶える直前見えた、勝ち誇ったような微笑を浮かべる「真理」は、人の顔をしていないように見えた。

(後書き)

こんな拙い文章を読んで下さりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974j/>

離教

2011年10月6日14時15分発行